展 望

対人コミュニケーションに関する実験的研究の動向と課題

小 川 一 美

(愛知淑徳大学)

Trends and Issues in Experimental Studies on Interpersonal Communication

Kazumi OGAWA

(AICHI SHUKUTOKU UNIVERSITY)

This article reviews recent experimental studies conducted in Japan on interpersonal communication. Then, the necessity for studies with a multichannel approach, including the integration of verbal and nonverbal communication is discussed. Next, studies on triadic communication and interpersonal communication from the standpoint of the observer are introduced. Furthermore, issues related to the relationship between studies on interpersonal communication and the construct of social skills, which has recently become a popular study topic, are examined. Finally, four issues are suggested: the explanation of the inner processes of the participants, the necessity for considering the participants' cultural backgrounds, the interest in the study of other fields, and the need to investigate the relationship between interpersonal communication and well-being.

Key Words : interpersonal communication, verbal communication, nonverbal communication, multichannel approach, social skill

本稿では、対人コミュニケーションに関する最近の日本の実験的研究を中心に概観し、取り組むべき課題について言及した。言語的コミュニケーションおよび非言語的コミュニケーションに関する研究をいくつか挙げ、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの融合も含めたマルチ・チャネル・アプローチによる研究の必要性についても研究例を挙げながら論じた。続いて、3者間コミュニケーションや観察者という立場から捉えた対人コミュニケーション研究など、2者間コミュニケーション以外の対人コミュニケーションの捉え方についても紹介した。また、対人コミュニケーション研究にも社会的スキルという概念が近年多く組み込まれるようになってきたが、構成概念も含めこの両者の関係性については十分な吟味が必要ではないかという問題提起を行った。最後に、対人コミュニケーション研究の今後の課題として、会話者の内的プロセスの解明、文化的背景の考慮、他分野の研究への関心、well-being との関係を検討する必要性などについて指摘した。

キーワード：対人コミュニケーション、言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーション、マルチ・チャネル・アプローチ、社会的スキル

近年、コミュニケーション力やコミュニケーション能力といった言葉が研究以外の場でも使われるようになり、一般の人たちのコミュニケーションに対する関心も高まっているように感じる。こうした動きに関連して今さらながら注目をされてきたのが、個人間で行われるコミュニケーション、つまり対人コミュニケーションである。本稿では、対人コミュニケーションに関する最近の

日本の研究を中心に概観し、取り組むべき課題について言及する。対人コミュニケーションは、記号化と解説という行動が中心となっている。しかし、調査的研究ではこれらの行動の実態を把握することは難しいため、筆者は常に、実際の「行動」を扱う研究を行うことを心がけている。そこで、本稿でも「行動」を独立変数もしくは従属変数として扱っている研究を中心に取り上げていく

ことにする。

対人コミュニケーションは、送り手、メッセージ、チャネル、受け手、効果という要素で構成されているが(小川, 2010a), まずはメッセージに着目し, 言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションに関する研究の動向や課題を探っていく。

I. ことばと対人関係

言語に焦点を当てた対人コミュニケーション研究には, 敬語使用に関する研究, 呼称に関する研究, アイロニーに関する研究, 欺瞞のコミュニケーション研究, 説得コミュニケーション研究などが存在する。岡本 (2010) は, 語用論, 社会言語学, 心理言語学の研究成果を念頭に置いたうえで, ことばに対する社会心理学的な立場からのアプローチが行われた研究をまとめている。そこでは, 社会心理学的なアプローチの特徴として, ことばが対人過程の中でどのように発話され理解されるか, ことばが対人関係とどのように関わり合うかという点が強調されている。まずは本稿でも, 言語に焦点を当てた最近の心理学的研究を挙げてみる。

ある言語を独立した言語と認めた場合, 方言はその中のバリエーションを指す(岡本, 2010)。日本の方言研究は方言の地理的な分布を調査し, 方言区画を行う言語地理学に代表されるように, 方言の収集・記録に重点が置かれていた。しかし, 海外では, 方言(アクセント)を用いる話し手に対する評価に関する実験的研究が多く行われており(Giles, 1971など), 日本でも方言と共通語の話し手の印象比較などが行われるようになった(岡本, 2001など)。町・樋口・深田(2006)は, 方言の使用が適切な場面とそうでない場面を設定し, 方言と共通語, さらにには場面に応じたことばの使い分け(コードスイッチ)の効果を実験によって明らかにしている。コード・スイッチングは, 会話者間の理解を高めるために行われることがあるが, 社会的アイデンティティとの関連から生じることもある。また, Giles, Coupland, & Coupland (1991)によるコミュニケーション調節理論(communication accommodation theory)における相手の発話スタイルへの収束や分離として捉えることも可能である(岡本, 2010)。このように言語やことばの使用も対人関係に対する影響力を持っているが, なぜそのような使用になるのかを心理学で用いられる理論に基づき解釈することで, 言語と対人関係の関連をより深く理解できるようになる。ただし, そうした研究はまだ十分に行われていないのが現状である。

欺瞞のコミュニケーションに関する研究として, 言語的コミュニケーションの特徴に着目したものもある。

Grice (1975)によると, 会話には必要な量の情報を述べるという量の公準, 偽りであると信じていることはいわないという質の公準, 関係のあることを述べるという関係の公準, 曖昧な表現を避けるという様式の公準という4つの会話の公準がある。この会話の公準が違反された場合に, 人は欺瞞性を感じるという情報操作理論がある(McCormack, 1992)。村井(1998, 2004)は, 情報操作理論に基づき, 会話の公準に違反した発言内容を文章で呈示し, 受け手による欺瞞性認知を測定するという実験を行った。また, 強調語が発言内容の欺瞞性認知に及ぼす影響に関する研究にも取り組んでいる(村井, 2005)。欺瞞ではないが真実を表明しない発話として, アイロニーに関する心理学的研究も行われている(石田・阿部, 2010など)。ただし, アイロニーの実験的研究については, 岡本(2004)に詳しく記されているので, そちらを参照されたい。良好な対人関係とは, 常に真実のみを表明し合う関係であるというわけではない。うそやアイロニーは社会的文脈によって多様な効果をもたらすものであり, 欺瞞のコミュニケーション研究などはこうした言語と対人関係が相互に強く影響し合う様を示す1つの典型として注目していくべきではないだろうか。そこから得られる知見は, 限定的な目的のコミュニケーション場面という枠を超えて, より広く活用可能であると思われる。

言語使用や限定的場面におけるコミュニケーションではなく, より広い日常会話におけることばに注目している研究もある。調査研究ではあるが多川・小川・斎藤(2006)は, 内面性の低い次元に含まれるような些細な内容の日常会話が対人関係の中で果たす役割も大きく, それらについて検討する必要があるとして, まずは話題となりうるテーマの重要度比較を行っている。Duck, Rutt, Hurst, & Strejc (1991)は, これまで見過ごされがちであった日々の出来事や状況に目を向け, 日常的に習慣となっているようなコミュニケーションを検討すべきだと指摘している。多川・吉田(2006)では, 日常の些細なコミュニケーションが恋愛関係の良好さに影響を及ぼすことが示された。内面性の高い自己開示が精神的健康や対人関係の親密化にとって重要であることに異論はないが, 「うわさ話」や「雑談」などの日常の何気ない会話は全会話のおよそ半数を占めていることから(Goldsmith & Baxter, 1996), 些細なやり取りだと軽視することなく, その機能などについて検討していくことも重要であろう。なお, 対人コミュニケーションという観点から「うわさ」に着目をした研究も行われている(竹中, 2005, 2007)。さらに, 日常会話で頻繁に出現する“ある個人が他者におかしさを感じさせることを意図して表出する言葉”である「冗談」に注目し, 対人関係との関連を検

討した研究もある(葉山・櫻井, 2008a, 2008b)。冗談と類似する概念として「ユーモア」というものがあるが、これに関してもなぜ人はユーモア表出を行うのかという調査的研究などがある(塚脇・越・樋口・深田, 2009)。これらの研究も、日頃の何気ない会話の中で繰り広げられることばのやりとりで焦点を当て、一見些細に思えるものでもその積み重ねは対人関係を左右する力を持っていることを結果として示している。

II. 非言語的コミュニケーションに関する研究

これまで、視線の機能、表情表出、表情解読の特徴などに関する実験的研究が行われ、対人コミュニケーションにおいて視線や表情が果たす役割の大きさが主張されてきた。遠藤(2008)も、“視線は特にその送り手の意図がどこに注がれているのかを、そして表情は特にその送り手の心的状態がいかなるものであるのかを、時に言葉以上に精妙に私たちに指し示してくれるという意味において、きわめて高度な情報価を有している”と述べている。しかし、その一方で視線や表情がいかなるメカニズムでどのような社会的情報のやりとりを可能ならしめているかについては未だ明確にされていないという指摘もしている。表情に関して言えば、“そもそも表情は情動を映す鏡なのか”という問いと、“もし表情がいかなる形で情動と関連性を有するものであるとすれば、表情は情動に関する情報をどれだけ、また、どのように発するのか”という問いが存在し、この2つの問いは、表情がどのような意味をいかなるメカニズムで発しているかという未解決な問題に対する主要な論点となっている(遠藤, 2000, 2008)。対人コミュニケーション研究として、人はどのような文脈下でどのような記号化を行うのか、どのようなメッセージ(ノンバーバルも含む)に対してどのような解読を行うのか、その精度はいかなるものかといった研究は行われてきた。しかし、遠藤(2000, 2008)が指摘する問いに対する解となるような研究は十分でなく、これらの問いに対する理論的かつ実証的な研究が蓄積されていけば、表情に関する記号化や解読行動のより詳細なメカニズムを説得力ある理論と共に解明することが可能になるのではないだろうか。上出・大坊(2007)などは、文化的背景も考慮した上で社会的スキルと表情の関連を検討しており、顔面部位による差はあるものの総じて社会的スキルが高い人は表情が豊かであることを明らかにしている。こうした社会的スキルの高さと記号化や解読力の関連も、遠藤(2000, 2008)が指摘した問いと無関係ではない。たとえば、社会的スキルの高い人とそうでない人では、表情と情動の関連に関する知識や信念が異なっている可能性があったり、情動に関する情報が

表情として発せられる量や形態に違いが生じたりするのであれば、表情と情動の関連は個人差という変数を媒介させることで整理できる側面があるのかもしれない。

個人特性を組み込んだ非言語的コミュニケーション研究として、落合・松井(2009)は、対人不安特性の高さに着目し、他者表情の認知に関する実験的研究を行った。対人不安とは“現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態”(Schlenker & Leary, 1982, p.642)である。Clark & Wells(1995)は、対人不安の高い者には対人場面において否定的な解釈をしやすという認知傾向があり、そのことは実際の対人関係にも悪影響を与えることがあるという指摘をしている。落合・松井(2009)はこの指摘に基づき、コミュニケーション相手の表情が変化する対人場面において、対人不安特性の高さが表情認知に与える影響を検討した。その結果、対人不安の低い者は、否定表情を示された際に認知した相手の否定感情が強いほど、その後肯定表情を示されると肯定的な感情を強く抱いていた。しかし、対人不安の高い者は、否定表情を示された際に認知した相手の否定感情が強いほど、その後肯定表情を示された際には否定的な感情が促進されていた。つまり、対人不安の高い者は、相手の感情の肯定的な変化を受け入れにくい傾向を持つと考えられる。この結果について落合・松井(2009)は、“高対人不安者は相手の表出感情が否定から肯定へと変化する場面において、その相手に対して不適切に反応してしまうことが示唆された。さらに、高対人不安者は、この不適切な反応により、コミュニケーション相手が一時的に否定感情を表出しただけでその関係を壊してしまったり、あまり関係が良好ではなかった相手との関係改善のチャンスを逃してしまったりすると予想される”としている。Leary(1983 生和監訳 1990, p. 194)は、“対人不安は、その結果として、対人関係の効果を低め、その他の楽しい会合での喜びを減らしたり、人々の社会生活上に好ましくない効果をもたらす行動的・認知的な反応を伴っている。行動科学のさまざまな領域の見解と成果を統合することによって、心理学者は、対人不安をよりよく理解し、より効果的に対処できるようになると期待したい”と研究に対する提言を行っている。Learyの提言からは長い年月が経っているものの、対人不安の高い者の不安が解消されているわけではない。落合・松井(2009)のように、対人コミュニケーション研究としてより詳細に対人不安傾向の高い者の解読や記号化の特徴やメカニズムを解明していくことは、高対人不安者に対する効果的な治療の開発という点でも貢献できるのではないだろうか。

ここまで非言語的コミュニケーションの視覚的チャンネルに関する研究を挙げてきたが、非言語的コミュニケーションには音声的チャンネルであるパラ言語も含まれている。話者の性格印象に影響を与える要因として、発話速度（内田, 2002）、声の高さと発話速度（内田・中畝, 2004）、発話速度と休止時間（内田, 2005a）、音声の中の抑揚の大きさ（内田, 2005b）などに着目した研究があり、これらは日本人の音響的特徴の基礎的な情報として非常に貴重である。

III. マルチ・チャンネル・アプローチによる研究

メッセージには、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションが含まれる。非言語的コミュニケーションには、さらにパラ言語、視線やジェスチャーや顔面表情といった身体動作、被服や化粧といった人工物など複数のものが含まれる。実際のコミュニケーションでは、これら複数のものが同時にメッセージとして送受信されているにもかかわらず、研究としてはいずれか1つの要素（単一チャンネル）に着目して検討されることが多い。しかし、単一チャンネルによる研究が蓄積されたとしても、必ずしもそれらの知見が加算的に人間のコミュニケーションの実態を把握することにつながるわけではない。

視線量と発話速度が説得性や信頼性認知などに及ぼす効果を検討した研究では（Yokoyama & Daibo, 2008）、発話速度が遅く、視線量が少ないときに信頼性は最も低くなるなどといった交互作用効果が示されている。また、荒川・鈴木（2006）は、発話のパラ言語的特徴と手のジェスチャー頻度が共変化する対人的条件が存在することなどを見出している。これらは、単一チャンネルによる研究では明らかにされない結果である。また、欺瞞のコミュニケーション研究では、統制可能性の高さの違いから、真意が漏洩しやすい部位や行動特徴が存在したり、複数のチャンネル間で表出パターンに不一致が生じたりすることがある（deTurck & Miller, 1985 ; Knapp, Hart, & Dennis, 1974 ; O'Hair, Cody, & McLaughlin, 1981 など）。一方の受け手についても、日常では視線のみ、ジェスチャーのみといった単一のチャンネルに着目しているわけではなく、複数の記号を手がかりに解釈を行っている。そして、複数チャンネル間で表出パターンが一致していないことに気づき、疑念を抱くということもあるだろう。こうしたことから、非言語的コミュニケーションのマルチ・チャンネル・アプローチは重要であるとされている（守崎, 2010 ; 横山, 2010 など）。

さらに、マルチ・チャンネル・アプローチは、非言語的コミュニケーションに限ったものではなく、言語的コ

ミュニケーションと非言語的コミュニケーションのマルチ・チャンネル・アプローチを試みた研究もある。

小川（2008）は、初対面の2人の会話が相互作用を重ねることでどのように変化していくのかを、発話量に着目し検討した。発話の機能に注目した Stiles（1992 など）の Verbal Response Modes (VRM) というカテゴリーに全発話を分類し、それぞれの出現時間と頻度を計測している。この研究における発話量とは、「何を」「どれくらい」話すのかという意味で、言語と非言語のマルチ・チャンネルである。様々な分析から、どのような機能の発話を行うのかという言語的側面と、どれくらいの量を発話するのか、相手よりも多いのか、同じくらいなのかという非言語的側面の相互の組み合わせによって、相手に与える印象は異なることが示された。また、小川（2006）は、同一の会話を文字という言語情報だけで呈示するテキスト条件、文字を実際の発話のタイミングに合わせてモニター上に呈示するテキスト＋交替潜時条件、音声として呈示する音声条件、会話時の会話者映像も呈示するビデオ条件という4条件を設け、こうした手がかり情報の違いが会話者や会話に対する印象に与える影響の違いを分析した。この研究では、単に言語的側面、非言語的側面という区別だけではなく、非言語的側面を視覚的チャンネル（表情、ジェスチャーなど）と音声的チャンネル（パラ言語）に分けたことで、初対面の会話場面という限られた場面ではあるが、音声情報に視覚情報が加わっても印象に大きな差は見られないということなども示されている。

ところで、メッセージを送受信する際、言語的コミュニケーションに含まれる意味と、非言語的コミュニケーションに含まれる意味が必ずしも一致するとは限らない。言語的には肯定的な意味なのに、表情などの非言語チャンネルが否定的な意味を表しているということとはよくあることである。佐々木（2006）は、言語メッセージと非言語メッセージに含まれる意図が一致しない条件の場合、言語メッセージと非言語メッセージのいずれのメッセージが、受け手による意図帰属や感情反応、さらには言語行動に強い影響を与えるのかに注目した。言語メッセージと非言語メッセージが不一致であるとき、より信頼できる情報源として非言語メッセージが用いられるという、言語－非言語一致性原則（Blanck & Rosenthal, 1982）と、メッセージの言語の解釈に注意が向けられることによって非言語メッセージの解釈に相対的に注意が向けられにくくなり、非言語メッセージが意図帰属に与える影響が小さくなるという、連合処理モデル（佐々木, 2005）のいずれが適用されるのかを実験的に検討した。その結果、好意的な言語メッセージを敵意的な非言語メッセージを

コミュニケーションの当事者である会話者に焦点が当てられてきた。しかし、木村・大坊・余語 (2010) は、人は観察者として他者の対人コミュニケーションを認知し、その情報をもとに周囲の人間関係を理解しており、自らが対人関係を円滑に展開し集団生活を快適に営むためには、観察者の立場から他者の対人コミュニケーションを認知する際の判断精度が重要になると指摘している。

Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe (1996) は、話者の表出行動が活発であれば、そのコミュニケーションはうまくいっていると観察者が判断してしまう表出性ハロー (expressivity halo) 効果という現象を見出した。木村・余語・大坊 (2005) は、高コンテキスト文化である日本でもこの現象は生じるのか、話題の感情価によって表出性ハロー効果が対人コミュニケーションの認知に与える影響は異なるのかなどについて実験を行った。その結果、日本人大学生を対象にしても表出性ハロー効果が生じること、また、ネガティブ感情エピソードではポジティブ感情エピソードよりも観察者による対人コミュニケーションの認知が不正確になることが確認された。さらに、木村他 (2010) は、観察者の対人コミュニケーション認知を社会的スキルの1つに位置づけることの妥当性の検討、および判断精度向上に必要な基礎的知見の獲得を目的とした実験的研究を行った。その結果、①対面交渉能力の違いにかかわらず、表出性の高い会話より表出性の低い会話の方が、観察者による対人コミュニケーション認知の判断精度が低下すること、②表出性の高い会話では、対面交渉能力の高い者は低い者に比べて、観察者による対人コミュニケーション認知の判断精度が高かったのに対し、表出性の低い会話では、対面交渉能力の違いが見られなかったこと、③観察を重ねただけでも、観察者の立場での対人コミュニケーション認知の判断精度が向上することなどが明らかとなった。木村他 (2010) の研究は、観察者という立場に焦点を当てることの積極的な意義を主張している点、対人コミュニケーション認知という基礎的な実験的研究を社会的スキル・トレーニングにまで発展させようとしている点など、注目すべき点が多くある。

小川 (2003a, 2003b) は、発話量の均衡が会話者や会話に対する印象に及ぼす影響について、会話者という立場と観察者という立場それぞれから検討した。その結果、会話者の場合は応答量や質問量が均衡していると相手に対して親しみやすさを感じるが、観察者の場合は発話量の均衡状態と会話者に対する印象には特徴的な関連は見られないというように、立場の違いにより異なる結果が示される部分があった。一方で、会話者であっても観察者であっても相づちなどの応答量が2者間で同程度の場

合に心地よい会話であったと判断するというように、立場が異なっても同様の特徴を示す点もあることが明らかとなった。

観察者は、会話者とその2人によって作り上げられる会話を客観的に観察するため会話事態の多様な側面に注目することができる。それに対して会話者は、自らが相互作用を行っており自身を客体視することは容易でないため、相手の会話者に関する要因に注目することが多くなることが考えられる。さらに、会話者は観察者よりも会話への関与度が強く、相手との関係性についても強く意識するため、相手の話した内容についてよく記憶することができるかもしれない。したがって、対人コミュニケーションに関する研究では、誰による認知なのか、誰に対する効果なのかという対象の違いについて敏感になる必要がある。木村他 (2010) が指摘するように、円滑な対人関係を展開して、集団生活を快適に営むためにも、観察者の立場から他者の対人コミュニケーションを認知するという行為は重要であるため、観察者の立場としての対人コミュニケーション研究を積み重ねていくことが求められる。

V. 社会的スキルと対人コミュニケーション

木村・磯・大坊 (2004) による二者間会話に関する実験的研究では、社会的スキルの高い者は低い者に比べて視線量が多く、自己接触が少ないことが明らかにされた。これは、社会的スキルの高い者は、相手に多く視線を向けて情報収集を行っており、自己接触を控えることで相手に神経質な印象を与えないように印象管理を行っていたためと解釈されている。また、谷村・渡辺 (2008) による大学生の初対面場面での二者間会話に関する実験的研究からは、ソーシャルスキルが高い者の方が低い者より相手に質問をする頻度が多いことなどが示されている。そして、“大学生が初対面でコミュニケーションをスムーズに行うためには、ソーシャルスキルを高めることが必要なことが明らかとなった”と述べられている。

社会的スキルと対人コミュニケーション行動の関連を検討する研究は増えているように思うが、社会的スキルを高めることと良好な対人コミュニケーションを行うことは、決して別物ではないはずである。社会的スキルの定義は多様であるが、たとえば相川 (2009) は、“ソーシャルスキルとは、対人場面において、個人が相手の反応を解釈し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制したうえで対人反応を実行するまでの循環的な過程”としている。つまり、社会的スキルが高いということは、良好な対人コミュニケーションができるということである (ただし、社会的スキルには広範な対人行動が含ま

れるため、良好な対人コミュニケーションができること以外にも様々な行動が含まれる)。社会的スキルを測定する尺度の項目に、対人コミュニケーションに関わる行動ができるかどうかといった項目が多数含まれていることからわかるように、社会的スキルという概念を目に見える行動という形で表しているのが、対人コミュニケーションなのではないだろうか（くどいようだが、社会的スキルには対人コミュニケーション以外の広範な対人行動も含まれる）。対人コミュニケーション研究に限らず、社会的スキルという概念が非常に多くの研究で個人特性の1つとして使用されている。そして、多くの研究で社会的スキルの高さによって対人行動に違いが生じることが示されている。しかし、それらの研究の中には、社会的スキルが原因となって当該の対人行動が影響を受けたことを証明したのではなく、尺度で測定した社会的スキルの高さを対人行動という異なる側面で証明したという、ある種、尺度の妥当性検討の研究になってしまっているものもあるのではないだろうか。この点に関しては、対人コミュニケーション研究においては特に留意が必要である。決して、尺度で社会的スキルが高いとされた人がどのような対人行動を示すのかを検討するような研究に意義がないと言っているわけではない。しかし、最近の対人行動に関する研究を概観すると、社会的スキルを説明変数として扱っている研究が非常に多い。社会的スキルという概念を何でも説明してしまう便利な概念として扱うことのないように研究者は留意すべきであろう。

VI. 今後の課題

ここまでにも引き続き検討されることが望まれる対人コミュニケーション研究のアプローチや視点を挙げてきたが、その他にも今後の課題として考えられる観点がある。それらを以下に整理してみる。

1. 会話者の内的プロセスの解明

良好な対人コミュニケーションのためには、伝えたいことを適切な方法で効果的に受け手に伝える記号化と、送り手によって記号化されたメッセージを受け取り、そのメッセージの意味を適切に解釈する符号解読が重要であることは改めて言うまでもないだろう。しかし、伝えたいことを正確に伝え、送られたメッセージを正確に解読することは決して容易なことではない。他者からは知覚できない自己の内的経験が他者に知られていると過大推定する傾向のことを、透明性の錯覚 (illusion of transparency) と呼ぶが (Gilovich, Savitsky, & Medvec, 1998), 武田・沼崎 (2007, 2009) は、ミスコミュニケーションの原因となりうる判断のバイアスの1つとして、透明性の錯覚に着目し実験的な研究を行っている。メッセージの送り

手が、受け手に自分の内的経験が伝わっていると思う程度を実際以上に過大評価する傾向を“行為者の透明性の錯覚”とし、メッセージの受け手が送り手の内面を見抜いていると思う程度を実際以上に過大評価する傾向を“観察者の透明性の錯覚”とし、2種類の透明性の錯覚を分けて検討している。その結果、送り手と受け手の双方に透明性の錯覚が生じており、さらに、相手との関係が親密である場合の方がそうでない場合よりも透明性の錯覚が大きいことが示された。太幡 (2010) は、透明性の錯覚の程度に被透視感が影響を与える可能性があると考えられている。被透視感とは、相互作用する相手に直接的に伝えていないのに、自己の内面を気づかれているかもしれないと感じる感覚であり (太幡, 2006), 気づかれない事柄への被透視感である懸念的被透視感 (太幡, 2008) と、気づいてほしい事柄への被透視感である期待的被透視感 (太幡・吉田, 2008) がある。相手への意図の伝達の程度に期待的被透視感を感じて曖昧な表現を用いてしまうことで、実際には伝わっていないのに伝わっていると錯覚してしまう透明性の錯覚が生じる可能性などが挙げられているが (太幡, 2010), 親密な関係の方が透明性の錯覚が大きくなるのは、こうしたわかってくれるはずという期待とも甘えとも捉えられる思いが関連していると考えられる。

なお、内的プロセスに関しては、発言をしないという発言抑制行動の原因や動機の解明を行った研究 (畑中, 2003) や、発言抑制行動前に生起する意識内容を手がかりとして、発言するか否かを決定する際の内的過程を検討した研究 (畑中, 2006) などもある。

これらの研究は、単にどういう状況や場面、行動の場合にミスコミュニケーションが生じやすいのかや発言を抑制してしまうのかではなく、なぜミスコミュニケーションが生じてしまうのか、なぜ発言をしないのかを会話者の内的プロセスまで踏み込んで検討している。「なぜ」を追究することは心理学研究の究極の目的であろう。日本における対人コミュニケーション研究は、この点が弱かったように思われる。自戒の念も込め今後の課題として挙げておく。

2. 文化的背景の考慮

顔面表情に関して文化比較を行った研究がある (工藤・マツモト, 1996; Matsumoto & Ekman, 1989; 中村, 1991, 1993 など)。これらに基づき大坊 (2007) は、文化によって典型とされる顔面表情は異なり、顔自体や顔によるコミュニケーションが心理的、社会的に有する効果は文化を超えて同じとは言えず、文化的な背景を考慮した上で、顔によるコミュニケーションの機能や役割を明確にしておく必要があると指摘している。文化的な背景を考慮する

必要があるのは顔面表情に限らず、他の非言語的コミュニケーションに関しても同様である。さらに、中村 (2000) は、表情に対する尺度評定を日米比較した Matsu-moto & Ekman (1989) の研究と中村 (1993) の研究を取り上げ、前者では「感情表出の強さ」を評定させていたのに対し、後者では「表出者の感情経験」を評定させていたことから、相反する結果が得られていたことについて論じている。これは、文化的な背景の異なるグループを比較する際には、測定するものさしを一致させることが重要であるが、それには困難さが伴うことを示した例と言えよう。

言語的コミュニケーションに関しても、岡本 (1985) が、言語的スタイルが関連する説得研究のほとんどが欧米で行われており、大部分が英語を母語とする参加者が対象であるため、それらの研究は追試不能であったり、追試しても無意味であったり、追試可能な場合でも全く異なる結果になったりするだろうと指摘している。日本語話者と欧米語話者の違いについて、“言語的に隔たりがあり、文法上の特徴がかなり異なる”、“社会言語学的にも差がある”、“非言語的音声的コミュニケーションの用いられ方にも、多くの場合差がある可能性が強い”、“社会的・文化的生活習慣の差があるため、欧米で説得効果を高めるのに有効だとされる要因が、必ずしも等価な力を持たない”ことなどを挙げている。さらに“日本語による研究は、日本語の特徴、日本社会でのコミュニケーションの特徴、さらには日本社会の特徴を十分に見極めた上で、従来の欧米での諸研究と共通に論じられる面、論じられない面を、明確に把握して発展させていかねばなるまい”としている。これは15年前の指摘ではあるが、今もなお、対人コミュニケーション研究の課題となっている。

3. メディア・コミュニケーション研究や他分野の研究への積極的関心

本稿では、主に対面状況でのコミュニケーションに関する実験的研究に焦点を当てて研究の動向や課題を述べてきた。対面状況に限定したのは、“対人コミュニケーションは、対面状況でのコミュニケーションを基本とする”という深田 (1998) の主張に基づいたためである。しかし、近年のコミュニケーション状況を考えると、メディア・コミュニケーションが個人や対人関係に果たす役割は非常に大きい。古谷・坂田 (2006) は、青年期の友人関係において、対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーションがどのように展開されているのかを探り、それらが対人関係の維持にどのような役割を果たしているのかについて調査研究を行っている。その結果、近距離友人では、基本的に対面ですべての内容のコミュ

ニケーションを行うことが関係維持につながり、加えて、携帯メールの課題的コミュニケーションや情緒的コミュニケーションも関係維持につながることが示された。一方の遠距離友人では、対面でコミュニケーションができないがゆえに、携帯電話や携帯メールでのコミュニケーションによって関係の維持を図っている可能性が示唆された。つまり、近距離友人と遠距離友人では関係維持のメカニズムが異なり、両方の関係を維持するためにはメディアの使い方を柔軟に変化させてコミュニケーションを行う必要がある。こうした知見は、対面状況に限定した対人コミュニケーション研究からは見出されない。現代の人々のコミュニケーション状況を捉えるためにも、そして、対面チャネルの持つ機能の特徴を明確にするためにも、メディア・コミュニケーション研究の知見が重要になってくる。

心理学内の他の研究テーマだけでなく、さらに視野を広げ他の学問分野にも関心を持ち、学際的な研究を行うことなども対人コミュニケーション研究の発展には必要である。岡本 (2010) は、“ことばに関わる諸現象には、言語間、文化間で異なりがあることが当然予想される”とし、日本語を対象とした研究を主に紹介している。特に、日本では対人コミュニケーションに関する社会言語学的研究等は多く行われているため、それらについて社会心理学的観点から興味深いと考えられる研究を多く引用している。対人コミュニケーションに関しては心理学以外の分野での研究は多く蓄積されてきている。岡本は以前からこうした他分野の研究に着目し、それらと心理学的研究を結びつけてきた。心理学以外の学問分野の研究知見と心理学的研究の知見の共通点や相違点を整理したり、他の学問分野の研究を心理学的に考察し直したりすることで、心理学的研究の特徴（欠点も含む）が見えてくるだろう。

4. 対人コミュニケーションと well-being

大坊 (2006a) によると、適応的な生き方をするためには、社会的スキルを磨き対人関係を円滑にすることが必要であり、その中心となる問題は対人コミュニケーションであるとされている。つまり、良好な対人コミュニケーションは適応的な生き方、well-beingにつながっていく。well-beingを追究するために必要となる研究の中にも、コミュニケーション力に関する研究が挙げられている (大坊, 2009)。ただし、コミュニケーション力という概念そのものが明確でないという大きな問題があるが、これについては小川 (2010b) などを参照されたい。さらに、大坊 (2006b) は、“幸福や健康を目指したコミュニケーションの効用を十分に理解した上で、相互協調的な高質な社会を築く努力が求められる”と指摘して

いる。2010年の日本心理学会第74回大会では、「well-beingを高めるためのコミュニケーション力—社会的スキルの研究—」というシンポジウムが開催された（詳細は「対人社会心理学研究第11号」に掲載予定）。対人コミュニケーションが個人の求めるwell-beingと社会としてのwell-beingの双方にどのように関連していくのか、さらには両well-beingを高めるための対人コミュニケーションとはどのようなものかを追究していく研究が求められている。

Ⅶ. おわりに

対人関係と対人コミュニケーションは循環的な関係にあり、相互に影響を与え合い、常にダイナミックに展開をしている。対人関係と一言と言っても、関係の種類、関係の進展段階など多様な要因が絡み合っており、一方の対人コミュニケーションも構造や要素、様態など非常に多様な捉え方が可能である。人が日々の生活の中でコミュニケーションという行為に費やしている時間や、そこから受ける影響力を考えたとき、それに相応する程の心理学的な対人コミュニケーション研究が十分なされているとは言えない。その原因の1つは、対人関係と対人コミュニケーションのダイナミクスさや複雑さなのかもしれないが、そこに挑む研究が増えていくことを期待している。そして、本稿を執筆することで、視点を変えれば対人コミュニケーション研究として捉えることができる研究は意外に数多くあるのかもしれないということに気づくことができた。しかし、十分な整理と統合が未だできていないため、残念ながらその気づきをうまく本稿に反映させることはできなかった。対人コミュニケーション研究として行われたわけではない研究の知見も、多角的に対人コミュニケーションを捉えうるものになることがある。それらを見出すためにも、今まで以上に柔軟な視点で心理学の動向を追っていききたいと思う。

引用文献

相川 充 (2009). 新版 人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学— サイエンス社
荒川 歩・鈴木直人 (2006). ジェスチャーは会話スタイルの一部か?—発話の近言語的特徴とジェスチャー頻度との関係およびその性差— 対人社会心理学研究, **6**, 57-64.
Bernieri, F. J., Gillis, J. S., Davis, J. M., & Grahe, J. E. (1996). Dyad rapport and the accuracy of its judgment across situations : A lens model analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 110-129.

Blanck, P. D., & Rosenthal, R. (1982). Developing strategies for decoding “leaky” messages : On learning how and when to decode discrepant and consistent social communications. In R. S. Feldman (Ed.), *Development of nonverbal behavior in children* (pp. 203-229). New York : Springer-Verlag.
Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia : Diagnosis, assessment, and treatment* (pp. 69-93). New York : Guilford Press.
大坊郁夫 (2006a). 社会的場面を考慮したコミュニケーション・スキルの研究 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2005-55 (2006-01), 1-6.
大坊郁夫 (2006b). コミュニケーションが築く高質の対人関係—社会性の維持・回復を目指すために— 対人社会心理学研究, **6**, 1-6.
大坊郁夫 (2007). 社会的脈絡における顔コミュニケーションへの文化的視点 対人社会心理学研究, **7**, 1-10.
大坊郁夫 (2009). Well-beingの心理学を目指す—社会的スキルの向上と幸福の追究— 対人社会心理学研究, **9**, 25-31.
deTurck, M. A., & Miller, G. R. (1985). Deception and arousal : Isolating the behavioral correlates of deception. *Human Communication Research*, **12**, 181-201.
Duck, S., Rutt, D. J., Hurst, M. H., & Strejc, H. (1991). Some evident truths about conversations in everyday relationships : All communication are not created equal. *Human Communication Research*, **18**, 228-267.
遠藤利彦 (2000). 表情を解体する—構成要素的アプローチから見る表情の本性— 心理学評論, **43**, 177-198.
遠藤利彦 (2008). 感応する心—視線と表情が発するもの— 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2008-32 (2008-8), 13-18.
藤本 学・大坊郁夫 (2007a). 小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の影響 実験社会心理学研究, **47**, 51-60.
藤本 学・大坊郁夫 (2007b). 小集団コミュニケーションにおける話者の叙述パターン 社会心理学研究, **23**, 23-32.
深田博己 (1998). インターパーソナルコミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学— 北大路

書房

- 古谷嘉一郎・坂田桐子 (2006). 対面, 携帯電話, 携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果—コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して— 社会心理学研究, **22**, 72-84.
- Giles, H. (1971). Patterns of evaluation to R. P., South Welsh and Somerset accented speech. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **10**, 280-281.
- Giles, H., Coupland, N., & Coupland, J. (1991). Accommodation theory: Communication, context, and consequence. In H. Giles, J. Coupland, & N. Coupland (Eds.), *Contexts of accommodation: Developments in applied sociolinguistics* (pp. 1-68). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998). The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read one's emotional state. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 332-346.
- Goldsmith, D. J., & Baxter, L. A. (1996). Constituting relationships in talk: A taxonomy of speech events in social and personal relationships. *Human Communication Research*, **23**, 87-114.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics, Vol.3: Speech acts* (pp. 41-58). New York: Academic Press.
- 畑中美穂 (2003). 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究, **74**, 95-103.
- 畑中美穂 (2006). 発言抑制行動に至る意思決定過程—発言抑制行動決定時の意識内容に基づく検討— 社会心理学研究, **21**, 187-200.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008a). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, **79**, 18-26.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008b). 過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討 教育心理学研究, **56**, 523-533.
- 石田容士・阿部純一 (2010). アイロニーによる非難の対象は反復的言及によって同定されるか 心理学研究, **80**, 485-493.
- 磯 友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫 (2003). 発話中のうなずきが印象形成に及ぼす影響—3者間会話場面における非言語的行動の果たす役割— 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2003-25 (2003-11), 31-36.
- 磯 友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫 (2004). 視線行動が印象形成に及ぼす影響—3者間会話場面における非言語的行動の果たす役割— 対人社会心理学研究, **4**, 83-91.
- 上出寛子・大坊郁夫 (2007). 3次元計測法による顔面表情に伴う顔形態特徴の測定(2)—日本人大学生の社会的スキルと顔面表情との関係— 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2007-22 (2007-5), 113-118.
- 木村昌紀・大坊郁夫・余語真夫 (2010). 社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの検討 社会心理学研究, **26**, 13-24.
- 木村昌紀・磯 友輝子・大坊郁夫 (2004). 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2004-10 (2004-07), 1-6.
- 木村昌紀・磯 友輝子・桜木亜季子・大坊郁夫 (2005). 3者間会話場面に視覚メディアが果たす役割—笑顔とうなずきの表出, 及びそれらの行動マッチングに注目して— 対人社会心理学研究, **5**, 39-47.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 (2005). 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検討 感情心理学研究, **12**, 12-23.
- Knapp, M. L., Hart, R. P., & Dennis, H. S. (1974). An exploration of deception as a communication construct. *Human Communication Research*, **1**, 15-29.
- 工藤 力・ディビット・マツモト (1996). 日本人の感情世界—ミステリアスな文化の謎を解く 誠信書房
- Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives*. Beverly Hills, California: Sage Publications. (リアリィ, M. R. 生和秀敏 (監訳) (1990). 対人不安 北大路書房)
- 町 一誠・樋口匡貴・深田博己 (2006). 話し手の方言使用と印象—コードスイッチの適切さと聞き手の出身地による影響— 社会心理学研究, **21**, 173-186.
- Matsumoto, D., & Ekman, P. (1989). American-Japanese cultural differences in intensity ratings of facial expressions of emotion. *Motivation and Emotion*, **13**, 143-157.
- McCornack, S. A. (1992). Information manipulation theory. *Communication Monographs*, **59**, 1-16.
- 守崎誠一 (2010). 帰納的研究は, 人のコミュニケーションを明らかにしてくれるのか—非言語研究への演繹的アプローチの必要性— 対人社会心理学研究, **10**,

- 72-74.
- 村井潤一郎 (1998). 情報操作理論に基づく発言内容の欺瞞性の分析 心理学研究, **69**, 401-407.
- 村井潤一郎 (2004). 発言内容の欺瞞性認知—公準の複数違反で欺瞞性は高まるか?— パーソナリティ研究, **12**, 116-117.
- 村井潤一郎 (2005). 強調語が発言内容の欺瞞性認知に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **14**, 92-100.
- 中村 真 (1991). 情動コミュニケーションにおける表示・解読規則—概念的検討と日米比較調査— 大阪大学人間科学部紀要, **17**, 115-145.
- 中村 真 (1993). 情動判断の日米比較 大阪大学人間科学部紀要, **19**, 41-57.
- 中村 真 (2000). 表情と感情のコミュニケーション—表示規則と感情表出のモデル— 心理学評論, **43**, 307-317.
- 落合萌子・松井 豊 (2009). 他者表情が変化する場合における高対人不安者の表情認知 対人社会心理学研究, **9**, 45-53.
- 小川一美 (2003a). 二者間発話量の均衡が会話が抱く相手と会話に対する印象に及ぼす効果 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2003-26 (2003-11), 37-42.
- 小川一美 (2003b). 二者間発話量の均衡が観察者が抱く会話者と会話に対する印象に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **43**, 63-74.
- 小川一美 (2006). 手がかり情報の相違が二者間会話に対する印象に及ぼす影響 社会言語科学, **9**, 27-36.
- 小川一美 (2008). 会話セッションの進展に伴う発話の変化—Verbal Response Modesの観点から— 社会心理学研究, **23**, 269-280.
- 小川一美 (2010a). 対人場面のコミュニケーション 相川 充・高井次郎 (編著) コミュニケーションと対人関係—展望 現代の社会心理学 2— (pp. 2-19) 誠信書房
- 小川一美 (2010b). 大学生にとってのコミュニケーション力とは 電子情報通信学会技術研究報告, HCS2009-68 (2010-03), 17-18.
- O'Hair, H. D., Cody, M. J., & McLaughlin, M. L. (1981). Prepared lies, spontaneous lies, machiavellianism, and nonverbal communication. *Human Communication Research*, **7**, 325-339.
- 岡本真一郎 (1985). 言語的スタイルが説得に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **25**, 65-76.
- 岡本真一郎 (2001). 名古屋方言の使用が話し手の印象に及ぼす影響 社会言語科学, **3**, 4-16.
- 岡本真一郎 (2004). アイロニーの実験的研究の展望—理論修正の試みを含めて— 心理学評論, **47**, 395-420.
- 岡本真一郎 (2010). ことばの社会心理学 第4版 ナカニシヤ出版
- Patterson, M. L. (1983). *Nonverbal behavior : A functional perspective*. New York : Springer-Verlag. (パターソン, M. L. 工藤 力 (監訳) (1995). 非言語コミュニケーションの基礎理論 誠信書房)
- 佐々木美加 (2005). 協調か対決か—コンピューターコミュニケーションの社会心理学— ナカニシヤ出版
- 佐々木美加 (2006). 会話中の不一致メッセージが受信者の帰属, 感情, 行動に与える影響 社会言語科学, **9**, 37-47.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation : A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- Stiles, W. B. (1992). *Describing talk : A taxonomy of verbal response modes*. New bury Park, CA : Sage Publications.
- 太幡直也 (2006). 被透視感の強さを規定する要因—自己への注意と他者の視点取得についての検討— 社会心理学研究, **22**, 19-32.
- 太幡直也 (2008). 認知的負荷が懸念的被透視感によって生起する反応に与える影響 心理学研究, **79**, 333-341.
- 太幡直也 (2010). 内面の被知覚の意識に関する研究の展望—概念の整理を中心に— パーソナリティ研究, **18**, 210-219.
- 太幡直也・吉田富二雄 (2008). 懸念的被透視感が生じる状況の特徴 筑波大学心理学研究, **36**, 11-17.
- 多川則子・小川一美・斎藤和志 (2006). 日常的コミュニケーションにおける話題の収集を目指して—テーマの重要性判断に基づく検討— 対人社会心理学研究, **6**, 71-79.
- 多川則子・吉田俊和 (2006). 日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響 社会心理学研究, **22**, 126-138.
- 武田美亜・沼崎 誠 (2007). 相手との親密さが内的経験の積極的伝達場面における2種類の透明性の錯覚に及ぼす効果 社会心理学研究, **23**, 57-70.
- 武田美亜・沼崎 誠 (2009). 共通基盤知覚がさまざまな内的経験の透明性の錯覚に及ぼす影響 対人社会心理学研究, **9**, 55-62.
- 竹中一平 (2005). 対人コミュニケーションの観点から見たうわさの伝達 社会心理学研究, **21**, 102-115.
- 竹中一平 (2007). 大学生の日常会話におけるうわさ

- の類型化 心理学研究, **78**, 433-440.
- 谷村圭介・渡辺弥生 (2008). 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係 教育心理学研究, **56**, 364-375.
- 塚脇涼太・越 良子・樋口匡貴・深田博己 (2009). なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか?—ユーモア表出動機の検討— 心理学研究, **80**, 397-404.
- 内田照久 (2002). 音声の発話速度が話者の性格印象に与える影響 心理学研究, **73**, 131-139.
- 内田照久 (2005a). 音声の発話速度と休止時間が話者の性格印象と自然なわかりやすさに与える影響 教育心理学研究, **53**, 1-13.
- 内田照久 (2005b). 音声中の抑揚の大きさと変化パターンが話者の性格印象に与える影響 心理学研究, **76**, 382-390.
- 内田照久・中畝菜穂子 (2004). 声の高さと発話速度が話者の性格印象に与える影響 心理学研究, **75**, 397-406.
- 横山ひとみ (2010). マルチ・チャネル・アプローチによる説得・依頼 対人社会心理学研究, **10**, 56-58.
- Yokoyama, H., & Daibo, I. (2008). The role of speech rate and gaze in persuasion. *The 29th International Congress of Psychology*, 525.